

学校だより 令和7年2月号



文蔵小通信



さいたま市立文蔵小学校

336-0025 さいたま市南区文蔵5-16-29

TEL 863-0721 FAX 836-1583



【文蔵小ホームページ】

きさらぎ

校長 渡邊 勝利

連日、厳しい寒さが続いています。1月下旬から2月上旬のこの時期が、1年で最も寒さの厳しい時期だと言えます。古くからの言葉で、2月は如月(きさらぎ)という別名があります。「きさらぎ」の由来には諸説ありますが、有力視されているのは、「衣更着」(衣を更に着る)です。立春を迎えるとはいえまだまだ寒い日が多いため、重ね着をする月だという意味です。他にも、徐々に暖かくなり木々が芽吹くことから「生更木」、次第に春の気配を感じ陽気になっていくことから「気更来」などの説もあります。つぼみが冬の寒さに耐え、春の訪れをじっと伺っている姿が連想できます。春の温かさに向けて準備をしているようで、元気が出てきます。

ところで、さいたま市でも冬場は氷点下になることがあります。そのような厳しい寒さの中、植物はどうやって過ごしているのでしょうか。「衣更着」するような仕組みがあるのでしょうか。

そこには、いくつかの工夫があるようです。代表的なものをいくつか紹介します。1つ目は、低温馴化(じゅんか)です。植物たちの冬支度は、秋から冬にかけて穏やかな低温にさらされることから始まります。低温馴化によって耐凍性を得た植物細胞は、夏季の細胞と比べて状態が異なり、冬の前に氷点下への準備が整います。2つ目は、細胞外凍結です。細胞内が凍ってしまうと細胞は回復できなくなり死んでしまいます。植物は、細胞外の水分のほうが先に凍ります。細胞外に氷ができると、周囲の水が引き寄せられて、氷の結晶は次第に大きくなっていきます。氷の周りの水は、氷に引き寄せられていく性質があるため、やがて細胞内の水も、細胞外にできた氷の結晶へと移動していきます。そして、細胞内は脱水状態となるので、凍りにくくなります。3つ目は、種子です。種子の中には乾燥に耐えられるタイプのものがあり、内部に凍結するような水分がほとんど含まれていないため、低温でも耐えることができ、子孫を残すことができます。植物にとって寒さや凍結は大敵ですが、耐えることができる様々な工夫があり、冬を乗り越えているのです。



【文蔵小のタンポポ】

これら植物の工夫は、学校教育と相通じるものがあります。学校生活を送るうえでの寒さや凍結は、児童にとっての困難にあたります。例えば、「授業が分からない」「いじめを受けている」「病気や怪我」「家庭に居場所がない」など、社会の様々なものが児童にとっての困難となります。これらに児童が耐えることができる工夫をすることが、我々身近な大人の責務だと考えています。

令和6年度は、文蔵小学校では、安心・安全な学校づくりに力を入れて取り組んできました。具体的には、「自ら挨拶ができる」「場に相応しい正しい言葉遣いができる」「いじめを許さない」「児童一人ひとりに寄り添った生徒指導・教育相談体制」「Sola る一むの開設」などです。これからの時代はますます、先が見通せない不安定な社会になるかもしれません。そのような状況において、児童の心身が凍結することがないように、引き続き家庭や地域と連携を図りながら、教育活動を進めてまいります。

「どの子ども子供は星。みんなそれぞれが、それぞれの光をいただいてまばたきしている。僕の光を見てくださいとまばたきしている。私の光も見てくださいとまばたきしている。光を見てやろう。まばたきに答えてやろう。光を見てもらえないと、子供の星は光を消す。まばたきをやめる。」

これは、教育者の東井義雄さんの言葉です。寒さに負けないよう指導方法や学校環境を工夫し、児童を温かく見守っていきたいと思います。